源氏小鑑下之巻宇治十帖目録

橋姫

椎の木

さまくひ

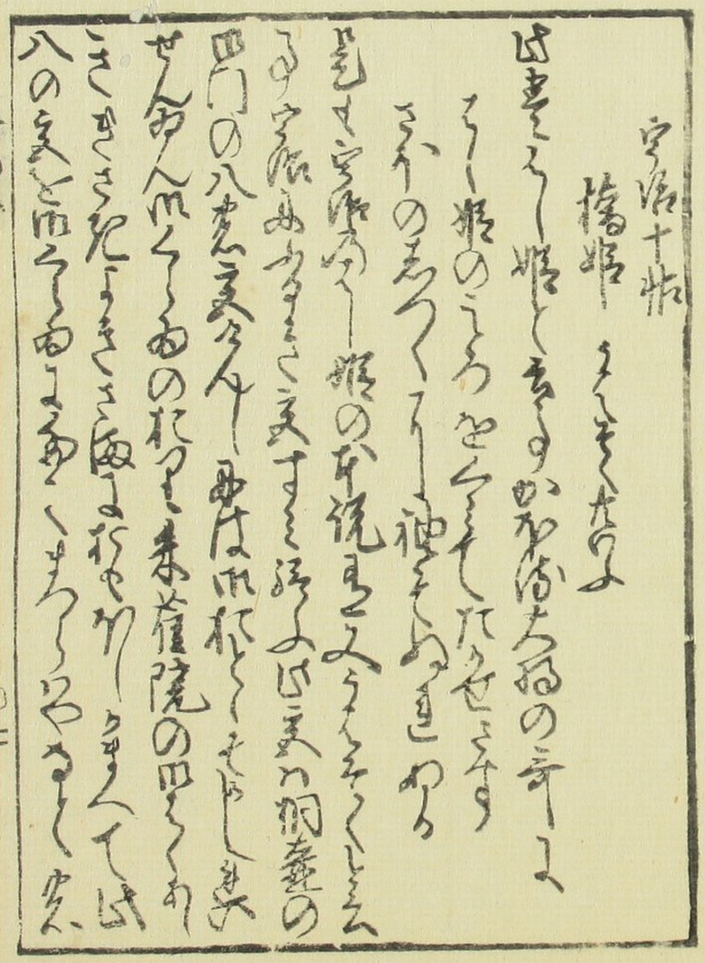
あけまもゝ

かけ紙山

笠のうきはし

中野文庫

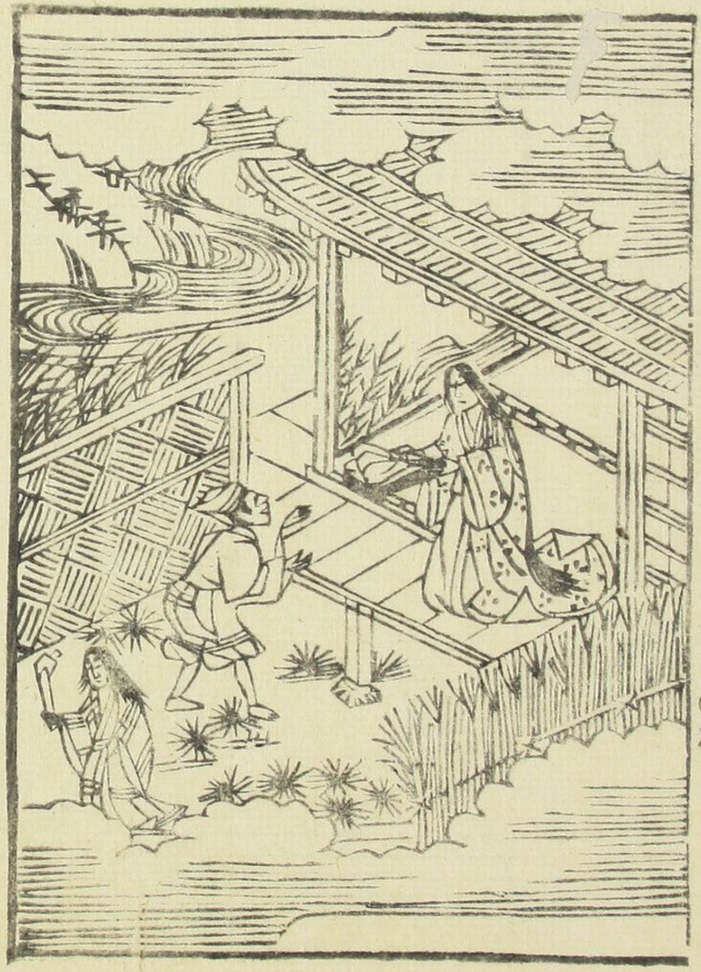
元曜文庫



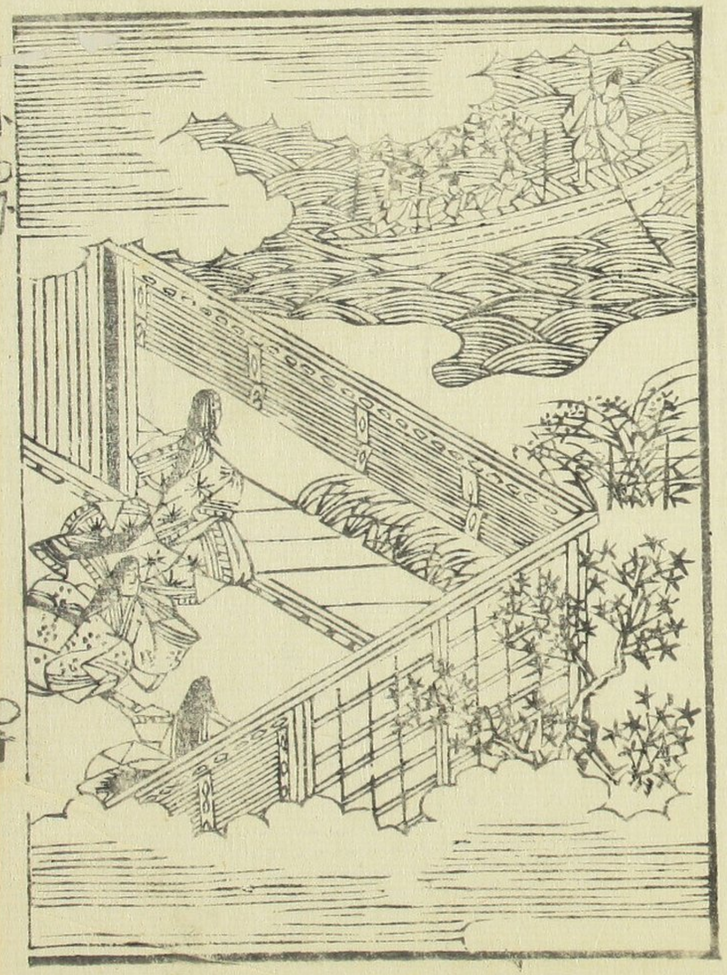
山田さるかはらす海面
みやこよりうち入るす
四方を　　たち
ありあきまのく　　さの弁人
さかのしつく　　川なしとうく

なとしたるまゝ　松さ此里に弁の君といひ
世房は此かわらの西しのかちく忍んのかゝ姉のと
こなり世代とあへて西国の東鎮守事は此さ也
かほよ都へのわりてこの文本姫君さらの作也
うこはくさふひかゝ姫君さらの作母ゝこよ
しこしをさるれさわし　ゆへなり松此文なくて

かわらは此へんの君は宰相乃中将志ひて對面し
てむかしの事たとかたりきかはいとあはれよ
かしさにおりゆく此弁の君をなほすてハかは
なるたこゝろしてふかの忍んのかゝいまハのこさハ
よいかまとして此文へ西てまつらんとて弁乃
三郎にしてかわらに西てまつる唐の浮鼎後にて
絶たる袋の中に海さかにかひし文の西にす
又云まひかゝのほにくかさうう文のありいかる
こしらかゝてうくまつるへきとおもふよ御つそ
まつらまし　さよとしくそしくまつりとりて

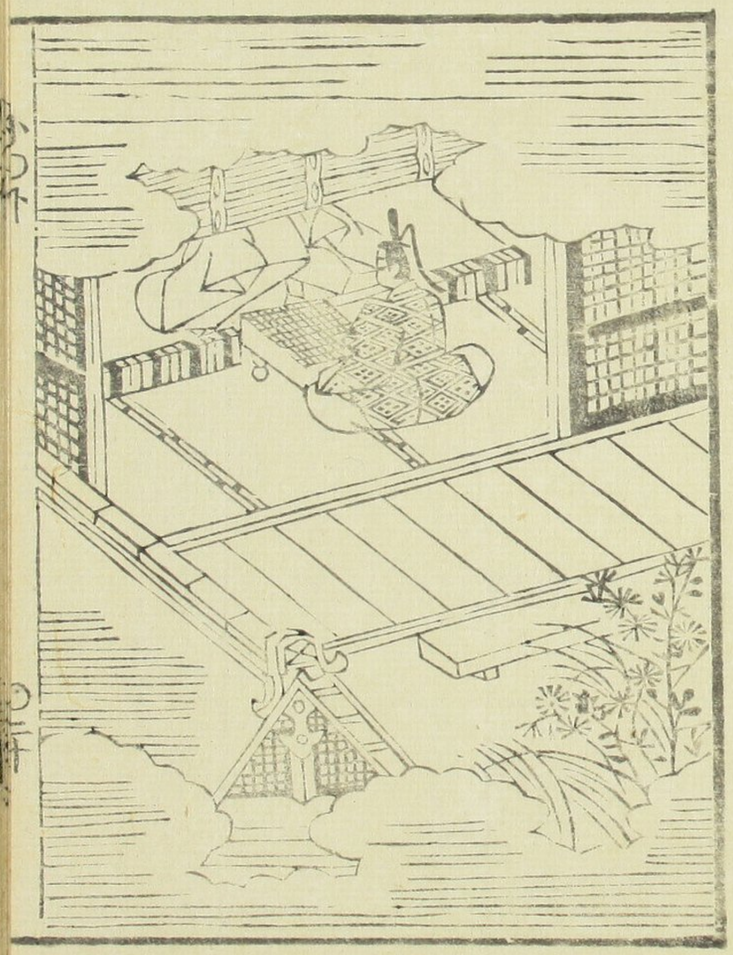


二絵前



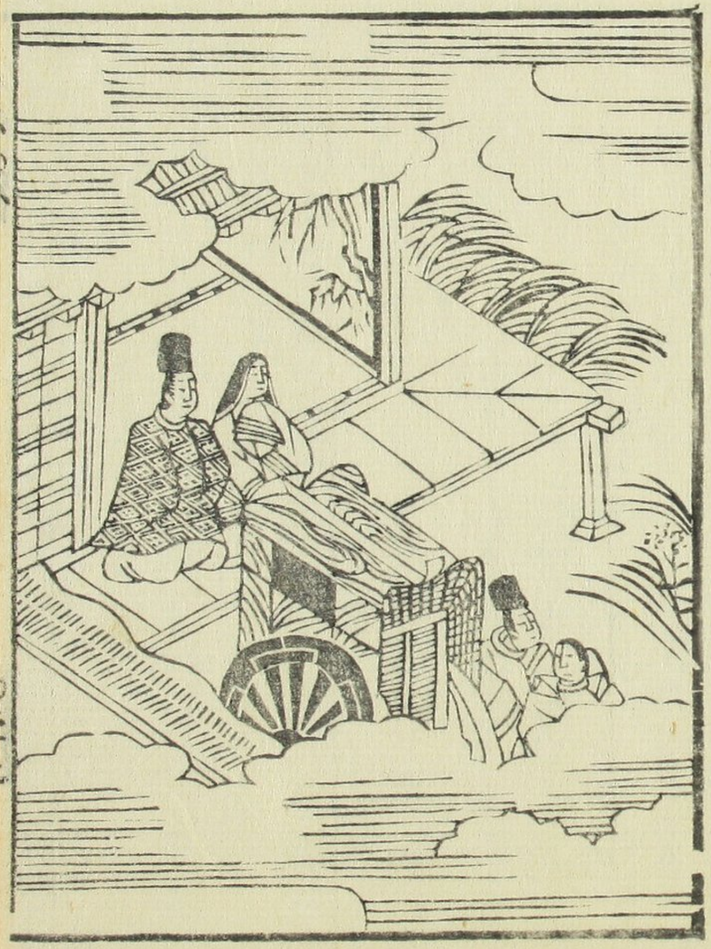
あきまれ公はまりしるけきなきとしたる
て付へしかゝるのうきまゝ程めくかりし
なとのかゝるめるへしこまてらハ
うぢ山　うぢ川　もみら　なと付へし
四　早蕨（さはらび）
此里さきしひとゝすらハそくのえのたのゝ
花にて人念仏なしなきこゝろそハのありもあ
しまいとりしひしまのさゝるも中の君婦君
よさくまくくさくひとりなめねりしまして西へる
のうしめよわらひ行くしなりしまするかこえ入て
なるとく

この君はまきかの尺せんなきくへの
かゝまゝに浜めるゝものさかゝひとゝあり



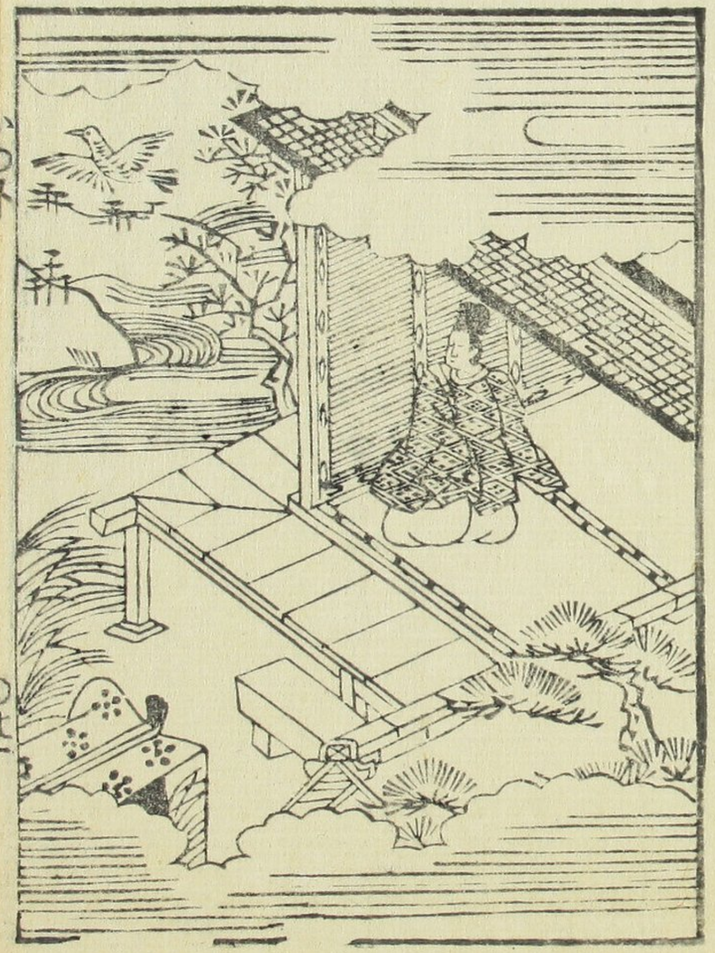
とゆきされしかたちの御かたゝ母君にはれりしまさ
ねとゝとのあひしなり
君はあへなかしそのきくまゝとく
のうりのうこいあせもとゝあるゝれ
とれは世らまゝてむとよ夜ゆしかゝて思
ひく事りあ[illegible]屋をさとゝや次のとしの
夜のさうりに夜つかあらく夜の事あしあひて
屋かくその夜大ねの御りとく夜うつろかせさ
まゝかりその夜の事まてかのまゝんのうま
の御ふ[illegible]第[illegible]ねふかうなり
六 四[illegible]の屋

此まゝをあつまやとゝろしかかりの中しよ
さしとむるむろしや志うきあつまやの
あまりけれとゝあるしそしきなる
とりしこゝのゆへかりこまゝうはみや乃
きこのうこかわりにゝうり出しあひうりし
ひかきゝを母さゝんのおねとゝんをまそてよむこ
ふとゝんとゝしそれをひたちのうこきく
御かたゝうりうとゝ御かたゝいとゝきこむことをひ
て屋んまゝ船よひきこしてむとよとうりし日た
しゝ御りて夜の出れこの御りとへつきてゆき
てあつまやゝ出此ゆのうこゆゆとのしまに夜さし
のそうせあひくとうくいひよりあひし程り



かくてそのあろうさまゝ西東のかのせて宮治へつ
きてれりしてすませ申ふさひの心ゑるとかふ
まゝあれひろ あらそくさ あるまやとの外
人なとしるの付人しあるとしかりしろう
なり此八九月かりさて大将ハ志ハ〳〵宮治へ
かゝりて世にあらふ
七 浮舟
此事こうさゝあとしるまきゝ西の宮にも
さらそれのこし後の文ハかりしを
このうさゝみひそゆく多志ゝ見ぬ
とりふ宮なり此ゆへハあるまやの君をかなりい

さるゆへ宮治にとりをさくく時こかよひし
程に舞臣の文かの御の田程のまれなのかり
見まひしへをいかなる人屋らんと志ゑ一さき
秋のうち三月あくゝ御のうさまさひそてまろり
まへハとうくいひまきしかしてすきゆく文の迄
の正月に文此れかへれりしまして うちとけて
れりしまれに宮治よりとそしうろ見ひけまろ
に付くゝ文をとりうへうゝ中ゆへなるまゝかもち
て来つゝとり文いたくゝうの文あるとそうさ
かりしさにとりて出説をとれかりしまるやかなる
女のひかりあやしくれなれ大将にそ宮治へ



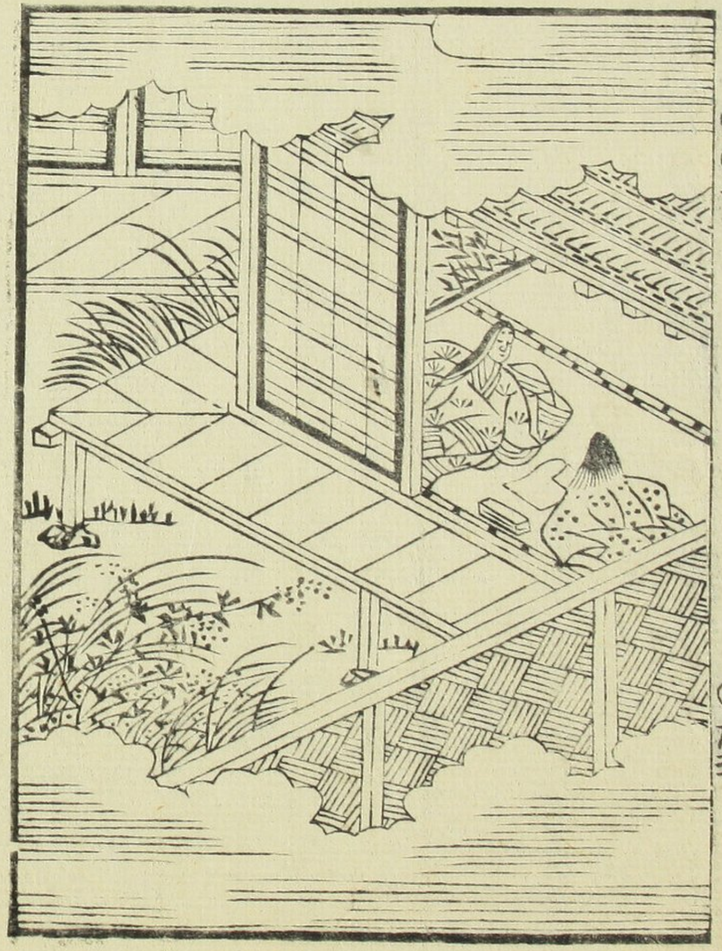
ひしまつりまひさりなるにいひて尼になりなる
かくてさぬく船のうちにも出しつゝ男をなんと
とていくさりしに家とかりし人に法まそゆく
とゝしかとより男の行くを思ひ志るをいく
なりなんと後ましく思ひて今に
男をなきしなるこの門のもやき世後
志かくこゝかけてこまうとゝめし
月乃おりしろきに法ぐくおがめて
こゝろに八秋のゆふ人とまうしとも
あるむる袖にり霧そみたるく
秋かくなりゆきハ大かたの色ぬしさも

あはまきなるにましてわらふ袖のよ物ひ居る不
すゝあはれの夕さあの夕をて五れはをし山里よ
つもハ今もこしいまて山よりさうけうる歌な
まへ松をしきく風のをともいとゝ心わそし門田
のいほかりとて蒸きをんなくものゝひ拂
ひし法くひさひさるゝ法をしあつまちの
ひちしてあはまきなり月のあるさ夜うちなりて
まきうくてうき世の中にあらぬとも
こまくれ志らむ月のみやこより

十　夢（ゆめのうき）浮橋

はまゝゆめのうきはしとゝるす源氏を多いよ
しへの業花をたしめ此方のさえもよにこ和
たかくむさまをまひて此かたらはひかりとさへ
いたまをまひて此ふよいとしくおはをし事をこ
こゝ由めれとくまくこゝつゝしの此なけさを
若者儀にして雲かくまをまふ又が格なり
こと業あれ此ゝ法ゝつまいたせハ掛かたり丸そ
ハみかゝ業者を志らせんとあるれハ夢のうき
はしとはいふなりたしをことはの風をもあよ
夢のうきはしとハたりさそ此まゝに大橋
きし

いたしまひくはまるしひの君の相とくのうちの
かゝかるをむりしのまくさめて此て法かん
せまふをれ法かひまて此文を法かはさるし志人
なくていいりとくかの人をあさにましなし
せし偽殺にお母をそ文をこひて大橋の此文
にまりそへくゆさしなり大橋の此文より
法のしとまつぬかみち此志人にて
其かねふ山りふゝ此ゝ ふかな
とありしなりしの此ゝ此ゝ此ゝ此ゝ此さ
なりしなるをこしまるしひの君の心の中
さゝそこ見えれ



文政六年癸未九月

浪華書林　心齋橋通安土町北へ入

加賀屋善藏梓